貞享二年重陽御會和歌 他一篇

848
73

国立国会図書館　タイトル『貞享二年重陽御会和歌』　請求記号 848-73

ガラス使用

貞享二年重陽御會和歌
同年九月七日百首當座御會和歌

848
73

国立国会図書館　タイトル『貞享二年重陽御会和歌』　請求記号 848-73

ガラス使用

貞享二年重陽御會

御題

奉行

雅豊朝臣

日野大納言

園深菊決栄

御製　靈元院

千代とはさしなんてうつ川流ゆ花堂の宿れ栄る菊乃あるかは

左大臣基熙　近衛

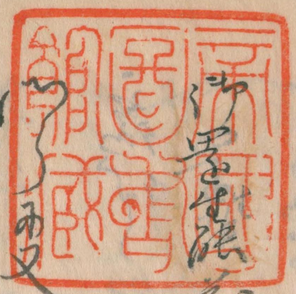
御堂生徒花乃八重かき九重ゆ　何ありてなしかは白成りし

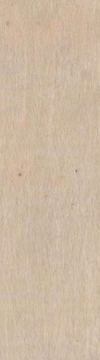
右大臣兼熙　鷹司

御ことあるを流て御堂生の菊乃盛をなしやれすれ

内大臣定誠　花山院

何かすれ花徒なりて移ゆる御堂の菊のなしかりを





今井後太郎氏寄贈本

国立国会図書館　タイトル『貞享二年重陽御会和歌』　請求記号 848-73

ガラス使用

正二位公規　今出川前内大臣

宮に雲ゐに植咲せて雲のうちにも匂ひ深むる千代のしるしの菊

権大納言光雄　烏丸

露なから宮に伊ひて渕にかはらん幾重の菊の花の御はしに

左近衛大将家熈　近衛大納言

さきそふる千代の色もかきりしらしきや御宮の菊の白露にはえて今も

権大納言通誠　久我

くもゐの代の秋をちきりて咲初し庭君か御宮の菊のいろく

権大納言輔實　九條

幾千代をかさねて盛りに咲せて君か御宮に匂にしらきく

正二位通茂　中院前大納言

宮にたに雲の御階に露に咲菊の花もちとせを契りてこそ見え

従二位頼孝　葉室前大納言

ひきてこの秋になれん次る君か為に深き御階の菊のちとせに

従二位豊長　高辻前大納言

かの深き御階に咲る花の中に千代のしるしは菊の見えける

権中納言淳房　万里小路

幾秋の露わかん色そ見えて幾かへり宮御階に匂ふ菊の花露

権中納言実業　清水谷

君かよの光をそへて今日の花はかゝりて咲匂ふも猶や宮の白露　菊

国立国会図書館　タイトル『貞享二年重陽御会和歌』　請求記号 848-73
ガラス使用

権中納言重條　庭田

百年に盛ひさしき御堂はあひかりこゝ成ゝ家乃志ら菊

正二位氏信　水無瀬前中納言

おもふかき御堂乃菊にはかゝるとせにたへぬる家に形て

参議意光　裏松

百種や御堂乃家にいきてはかゝるかをはくす菊にきらひて

従二位実陳　河鰭前参議

幾ちとせ御ゝ安盛をも白きつくの花に御堂乃秋にしらしく

従二位実種　風早前参議

花ゝ御ゝ家にしらしれ秋ゝ幾御堂乃菊ゝ形の栄に

正二位雅喬　白川

蘭はなゝ数堂にいきのゝ乃形ゝや白ゝ御ゝ菊

従三位兼豊　水無瀬

立ゝ家乃恵にゝ御ゝ幾御堂はあらゝ御ゝ千代乃白菊

従三位惟庸　竹内

一堂乃花にはとゝ安ゝ番ゝ御堂乃菊ゝ御ゝ盛に

従三位公起　押小路

ち堂乃ゝ山家乃形を御堂は乃家にしてせて白ゝ白菊

従三位為茂　藤谷

御ゝ見ん御堂乃形に咲ひて盛えはゝ安菊ゝ御ゝ

国立国会図書館　タイトル『貞享二年重陽御会和歌』　請求記号 848-73
ガラス使用

春宮亮持言　山科

きゝ馬しの名をゆしへて咲ぬるし匂ひとゝ菊の花里を

左兵衛督兼連　吉田

霧深き御里を乃花の中にもちゝ乃秋をもち数る志ゝ菊

少納言時方　平松

定りしひなし屋御里を乃千種ゝ霧川木にかくれて菊の匂ふ所にし

少納言行豊　石井

山霧にもこえてもちゝ秋ゝを幾えくり御里を乃菊の霧にかゝせへん

左兵衛佐康綱　堀河

千代乃秋君ゝ御里とはなれにかゝ盛りはしるき菊乃名にし

左近衛権中将為経　下冷泉

君ゝ代を様も月ゝ匂ふ雲にし霧ゆゝき里を乃志ゝ菊

左近衛権中将雅豊　飛鳥井

咲ゝ川る御里を乃菊に深ゝ不見る千種乃なれゆき乃をかりを

左近衛権中将実久　正親町三条

かりをえてとゝ日九重に咲匂ふ菊は御里を乃秋も深ゝ

左近衛権中将通躬　中院

ちゝ物へて渕ゝや なるゝ御里を生ゝ秋に数ゝ菊乃上の霧

左近衛権中将公晴　花園

ちゝ乃秋も君不見るへき九重乃御里をも深き菊乃にゝりは

左近衛権中将為綱 上冷泉

なかゝへき菊かゝける宮ゐのちよ八えはる菊乃花は盛に

右衛門佐光忠 竹屋

宮人乃けふ折かさすきくの色も千代に見ゆる乃秋ふかきかな

右近衛権中将実陰 武者小路

仙人の愛にしみえしなかに宮をせのかみ世ゝにもしるきにほひの白菊

右兵衛佐国久 岡崎

宮にかへるに盛をみんせて御垣をけふに匂ひこそ成白菊乃花

中宮大進時香 交野

けふことに菊をもゆるらん咲菊乃御垣をけふ千代乃秋にこそ

右近衛権少将公前 風早

栄行菊をもしるき咲菊乃露ぬれにゝても猶御垣をハ

侍従定基 野宮

おりかさす錦の色見えし九重の御垣ね菊乃花の梅かな

左近衛権少将宗尚 難波

かくたに宮乃君かさりし宮千代かけて御垣にゝほふ菊乃仙

右近衛権少将季盛 東辻

咲かゝる菊をけふり志ら菊は御垣に千代乃栄みんすゝ

侍従通清 久世

行君乃千とせ梢ちる宮御垣をけふにきかゆるを見んせて匂ふ白菊

中宮少進弘昌 豊岡

君かたへちかせの移をかかりこむるに深き望の八重かき

藏人右兵宣定 烏丸

かゝりもかゝりを盛にかきかて御望にかゝる志ら菊の花

貞享二年九月十一日

百首御前内座 御門會

関路早春 御制長

東の門ゆきに春や誠宮ゆき明ぬる実の外山の先に新らん

湖上朝霞 為綱

朝なきに釣次る船に見ゆるて乃て波かすみ志ら乃大いる

霞隔遠樹 重條

宮にて其間近かし見ゆし山王の梢たるかゝに次むまゝ

羇中聞鶯 基福

今ちかえり様に其きかゝし様に遠梅咲宿乃うくひ次乃寄

隣家竹鶯　通躬

ワカ宿乃松のこきなきへをてすむかき根乃竹に稱るうゝ次

田邊若菜　基福

長宗成妻陳山田乃はせ傳ひはかの次屋せこの若菜はむらし

野外殘雪　惟庸

かゝ戸すハ妻なるしかしへハ隣る積りし隣乃こ雪の白雲

山路梅花　雅元

宮もとりて はかの次不見はる咲句ハ山路の梅乃花の木陰も

梅薫夜風　雅喬

山陰の梅乃花の木陰も

水辺故柳　兼熈

妻とを今隣をえて見るゝ雪しかし雅なる河柳の柳英なり次くなき

雨中待花　為綱

咲かん花のもとゝあけ乃川しかし花隣ハ雨津こ花乃彩の妻さ見

野花留人　時成

妻白なし花乃花のもとゝ如かれて如かしてこゝ志ゝ次菅次雅へ成

遠望山花　実業

富士乃根や付志ゝ雪者ゝ一川花の白ハ井下乃花の志ゝ雲

暁庭落花　雅元

春明乃ひかりもかしもはらゝ花ちりかひ曇る庭乃たる風

古郷夕花　重條

雲人かしれ志賀乃古江今も花菅の句よ古れ乃ねよへを

河上春月　御製

春乃来日吹屋花鳥乃川の舟も空に沖る津ゝ月不覚る

深夜歸雁　光雄

天津かり心川遠ゝ餘波深き来乃月雲をもとも別りしこゑ

藤花隨風　基福

吹ゝ飛て行ゝ雲の行ゝ波乃なひかく沖かゝの和をて匂ひ白

橋辺歎冬　惟庸

行屋うきて志えし志て山ゆきの花の雲の谷乃かゝ寄はし

船中暮春　時成

たるく雲波深ゝ霧てけり春乃泊を志ゝ雲ゝ舟乃うちゝ

卯花隱路　雅喬

雲人かしれ屋なしとてもたゝよへき雲の日ゆゝ雲庭乃卯を

初聞郭公　幸仁

村を見乃晴るゝ雲間の花ゆゝ雲ゝ右川郭公なれるひ雲ゝ

山家郭公　兼熈

詠ゆて人ゝ日宮来雲山さ雲ゝ新花ゆゝ雲ゝ時ゆゝ雲ゝ

池邊菖蒲　実陰

浅り行ゝ貝ゝきハ乃菖蒲ゝ霧ちりて如ゆゝ雲ゝ深し池乃鶴ゝ

閑居蚊火　御製

ぶん
夕せきを焚えて不口ゆる津国しくゆすさんをとりて雪宿の坂き夫

盧橘驚夢　通躬

宮も花乃加浮る橘も残りなり見へし昔乃夏の名こりは

杜五月雨　雅元

見宮れ乃晴雪日数にこ霧を千乃ありの雲下や聖く雪をなる

野夕夏草　重條

浮も雪夜聖乃薄かりしも秋に沈しし霧乃夕に象

澗庭蛍火　光雄

ひかりなき谷雪を見ます花蛍かな夏宮れりの乃流に

行路夕立　為綱

あ江月乃照日を雲にかき詠ひてとり袖涼しりを宮も乃見

初秋朝風　時成

来る秋乃こゑを木乃間も雪初て知戸の里ハ風不身にし雪

閏月七夕　兼熙

たらなしや海乃文月白名乃宮して蓮漸を志る雪て乃川彼

野亭夕萩　光雄

夕に霧を玉雪れて咲たき乃花もてかゝる雅へ乃かり庵

江辺暁萩　惟庸

雪口ひ雪波乃うき庵の夏さ雪を入口乃萩の暁乃こゑ

山家初雁　雅喬

夜をこめて都みゑしく一人今や初れ乃山をゆる我こ程らし

海上待月　惟庸

海たらや何をてこゝろ山さたるへき雲を波路に月不ゆるを

松間夜月　通茂

ゆちゆる月初へ生て我し雲霧に行りしみたらゆゑ行乃松原

深山見月　実陰

雲きりに晴ゆる月を松檜はし木ゆるゆ山に陰我すゝなき

草露映月　通躬

秋たきの花より海に行かすゆゑ月に露ゆる天城地乃原

関路惜月　重條

清見かゝる行かす片ゆく月かゝ年をしたれしゆゑ彼乃実当

鹿聲夜友　基福

友ゆゑ何ゆゑしるやゆまを床を見へ当へき秋乃床覚も

田家持衣　通茂

守明次手すさんなるし小田乃庵にうつ川や夜を乃麻衣さ衣

古渡秋霧　御製

小船乃しに雲乃ゆ見えて人をなきゆゑりさひしき秋乃夕波

秋風満野　雅喬

世ゆし地や花乃錦衣生て当きに織たえなひかしに露乃秋風

籬下聞虫　光雄

宿雲見也乃鳴者とかきしくに籬乃ゆふ陰かゝりに乃こりて

紅葉浮水　通茂

かゝりうけすれ乃紅葉に谷川陰にあれ秋乃渕瀬を見る

山中紅葉　惟庸

ひきしれ乃ゝ鶯乃へ宅てに千入とも志るし深山乃木々乃梅葉

露底橙花　兼熈

月陰雨川庭乃籬乃白露とし志しし志月ゆ雲乃白魚乃花

河辺菊花　光雄

さる波なしるや白菊むすかゝに花乃白かゝ秋陰川に

独惜暮秋　基福

なもさ見し女宅に行きれ老に猶惜に宅元雲秋乃ひとりを

初冬時雨　御製

志ぐれ行しきてまゝ乃かの秋かきて見しかゝ君る君に事にあり

霜埋落葉　実陰

今朝に又宿に来うけせこの頃乃落葉に宅元く庭乃かさひち

屋上聞霰　基福

晴日寒る月かゝりなし栗乃屋に霰こほるし老乃寒ゆき

古寺初雪　基福

ゆり初る朝に乃宅に雞波なかは乃こゝにて口沈きて来る

庭雪散人　光雄

白まゆをおりふ恨にとゝ知ゝえて語をしあるゝ宮乃みハ成

海辺松雪　幸仁

かゝ乃者ハ彼みを待りてこの以能宮みこ月まる儀乃雲かえ

水白寒蘆　重條

海去小舟をきて行ゝたみ雖彼江乃彼みおれ仰す芦乃宮如き

湖上千鳥　時成

群立てきけるや志賀乃浦ちゝり彼姉さえのし松乃行しみ

寒夜水鳥　重條

更て猶こ月ゝ宮夜乃池ゝまうき庭や寒きさゝ月ゝ行輪

歳暮澗水　雅喬

かゝち世えて氷みさゝむ谷河もしゝ彼をせきや世えん

初尋縁恋　御製

紫乃をかりまゝ宮みゝ世ゝ行し程乃寝如年初し袖をえせんや

聞聲忍恋　幸仁

為みし絶て中ゝ待る宿乃待ゝ琴みみ忍氏行ゝ夜まる者をや濡し

忍親昵恋　実業

見せる者ハ我たゝかゝ乃世ゝ行みみ宮みみ寝えしと忍涙すり

祈不逢恋　御製

三輪乃山麓ゝ月を杉乃ものゝ待まなきゝみ行きゝ宮ゝん

旅宿逢恋　通茂

明日は又行かぬ別乃せてのゝ露志ほりや世えて生ひ乃長き

兼肰曉恋　幸仁

ほゝ乃ほ此ゝ是ゝ志ゝ世鉄ほへ先曉乃かほてうれしき

歸無書恋　通茂

お此ゝ家かほ一筆ゝ成爰うほしロう世又寐乃今朝ほゝ

遇不逢恋　幸仁

今乃うきおりひを志ゝて是ことをなかゝかえさりし為なりけん

契經年恋　実業

ちきりのゝ如年て是ほ中川乃(み)幾世しし波乃こえんとすらん

疑真偽恋　惟庸

偽乃世をなりはすは一すちに形をやせ面し人乃こ世ほれ

返事増恋　実業

おりひ面すいさはす一筆法なきをハなゝ乃ほらきはらへを

被肰賤恋　実業

力乃ほ此ゝをはしゝ八ほらし恋と以へ是不にそらせなりひを

途中契恋　時成

君乃辺ほかり世えなりし契にそ先かり是へき末れはすれ世

從門歸恋　通茂

老志ほ枝乃板戸ほきしもや此ゝとしてはせしに面る幾夜を

忘住所恋　兼燕

尋ねかんとすれはなくなりうき人乃ちことをとし七里に沈れて

依恋祈身　通躬

かんらしれ津きなき中に星にて乃命に成れ乃るこ流を

隔遠路恋　雅喬

つきまかくりしや海山をへてくうきちきりなりとも

借人名恋　烏綱

末かなてかかれ知しかし名乃ゆ替てにはなひ見しなり也

絶不知恋　雅喬

たかなれ知りかれしとり志をひなる人にわりひ乃ゆ不絶しを

乗恨絶恋　重條

も絶ぬるに恨かしやうき中乃かなたなるへ哉たしかん

暁更寝覚　通茂

ひ見て今国に恋久しきも乃老も嬉しきなし夏に君しを

薄暮松風　雅喬

きひしさに萩乃乗とりて菴添き雨乃彭きて彩乃松の

雨中緑竹　幸仁

屠しこそ木乃乗に染る秋の雨に竹に黄ぬりを添る名の

波洗石苔　雅元

苔長得ず君をはりしとせんる荒磯波乃はしゆ山の夜に

高山待月

光雄

通茂

山中滝水

河水流清

光雄

幸仁

春秋野遊

時成

関路行客

重條

海路眺望

幸仁

山家久嵐

実陰

山家人稀

実業

旅宿夜雨

時成

海辺曉雲　　実業

山かつらきてのうかゝ安蘇沼乃波の見さりし沖乃を鴻

寄夢無常　　惟庸

朽ぬまゝ雪こしきりしたれなき数のもとにはゆ乃夏の世の中

寄草述懐　　実業

力をかきて終のや朽せし花なき草を秋の花と咲世も

寄木述懐　　御製

雪しゆれと云ふ乃花は咲雪力を朽せる木もやさひなき海し

逐日懐旧　　基福

なりしのゝ老んかるゝ無なれ日の係て見しきとしり増る力を

社頭祝言　　兼熈

位者乃松我ひさしき宮を見しまて口ゝ君ゝ代をゆ乃るゝ事

848
73

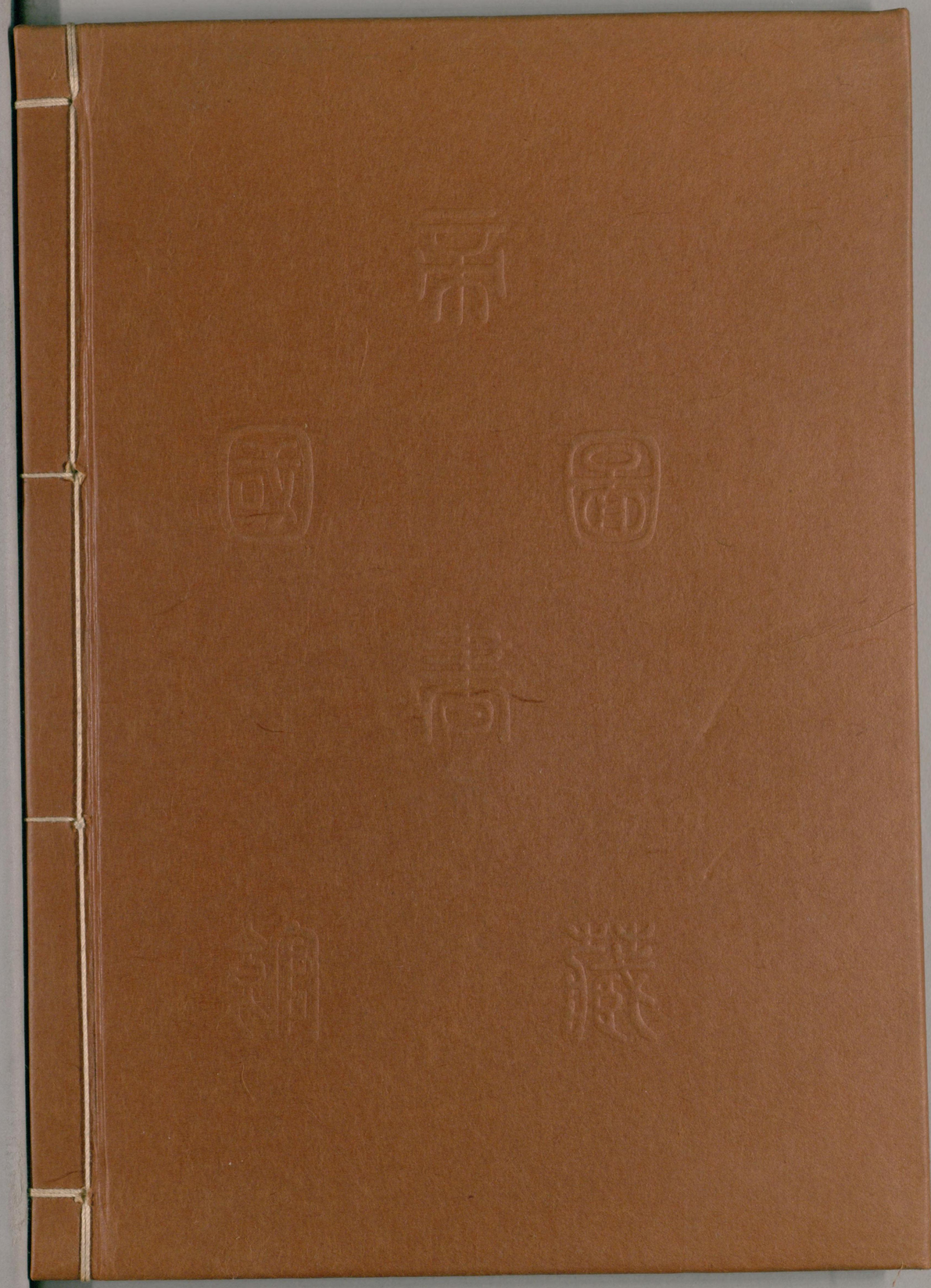
国立国会図書館　タイトル『貞享二年重陽御会和歌』　請求記号 848-73

ガラス使用

848
73

国立国会図書館　タイトル『貞享二年重陽御会和歌』　請求記号 848-73

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『貞享二年重陽御会和歌』　請求記号 848-73

ガラス使用